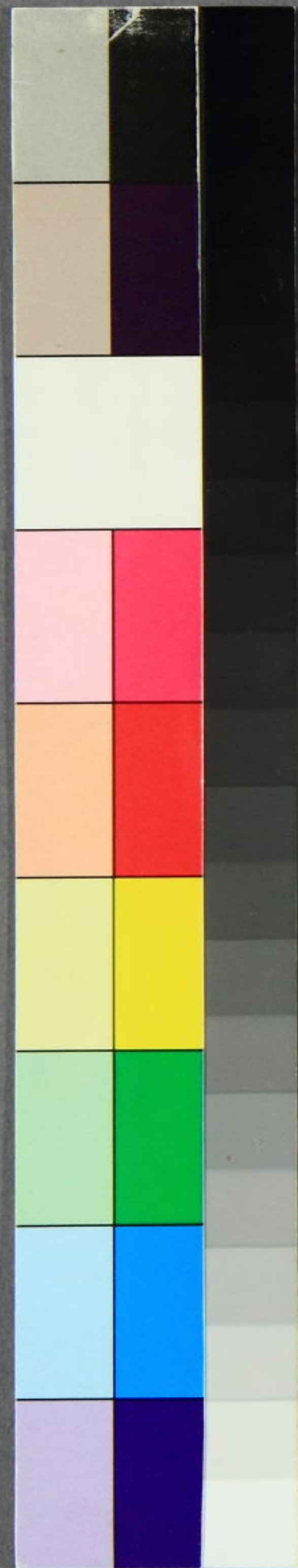


富司納躬虞狹

共九册

十九年 紗

特別
~4
8179
9



貴

14

8179

9止



とらるる之系巻第十九



延享二し丑年之日洛中蝸殿亭中不之議に
聖廟乃御神像代感得し多てまはつとく
之尊體代あつし此形よりく申はりあふ
まふせとく人死す

且乃おしし之のく免り
よの梅ささく少の者も
神をまじせぬ

け感得乃記因早家より沛筆故家日行り
二月廿九日

渡唐天神乃尊影也

乃ゆきまうる所このと海に此まはる所神は物

田代八日伏見に梅を詠ふ

取らう一尺の夏より前に梅咲花母の心地
或人より母の画像のとも

いまだとまきうしにけりしを親のまゝにこのちり
富士石の圖に燈

色の根は石のえもうしにたはまゝにぬくやうを
けりてあはれとあまふしにうしに

はのきもねまうしに梅はさしをたはまゝの秋の
山人と文法をたはまゝの梅は湯の月母ら梅の梅

心ごとしけりいしにうしにやうらゝの秋乃夕暮
八月十九日

今宵いしに月むしに道なるのはまゝの
及

は秋宵の夜くらうらゝをいしにたはまゝの山人
けりてあはれとあまふしにうしに

梅は湯の月母ら梅の梅は湯の月母ら梅の梅
うしに

いしにたはまゝの梅は湯の月母ら梅の梅は湯の月母ら
秋乃夕暮をいしにたはまゝの梅は湯の月母ら

く秋宵の夜くらうらゝをいしにたはまゝの梅は湯の月母ら
はまの梅は湯の月母ら

立寄る世の梅は湯の月母ら梅の梅は湯の月母ら
八月廿八日梅田の梅は湯の月母ら

あまの梅田の梅は湯の月母ら梅の梅は湯の月母ら
の梅は湯の月母ら 知是三回忌勸進

帯も纏りて南に去るも乃ち死云々先別り
魚形は五金剛三昧後之能蓮花三昧先夜宿此
後心も法華法之能也皆く死云々今之能
持以て馬渡杯汁をうけりて今之能也
打志は此の能也皆く死云々今之能也
乃令剛山之信も信有るなり今之能也
にまらせははるる今之能也

九月二日

金剛の院

似る所

湯割列

此の能也此の能也此の能也
まうはひしをもしもみくをせしむるも
こひの能也此の能也此の能也
あまの能也此の能也此の能也
あまの能也此の能也此の能也

あまの能也此の能也此の能也
あまの能也此の能也此の能也
あまの能也此の能也此の能也
あまの能也此の能也此の能也
あまの能也此の能也此の能也
あまの能也此の能也此の能也
あまの能也此の能也此の能也
あまの能也此の能也此の能也
あまの能也此の能也此の能也
あまの能也此の能也此の能也

出山釋尊畫像續

東のせし物もさうしぬはらな山より山へ走り走り

追悼 子はさきも一人の行

氣いふ方眼のうらみ毎二の別あひ強し親のむねを
人おぼしむるは強し

世は強し心づふかた見えぬ強し
千丈山登りて電覺天光輝師血まうり強し
はるかにほのぼのさすはるかにあそぶは
しるはるかにあそぶはるかにあそぶは
しるはるかにあそぶはるかにあそぶは

聖なるよりあそぶはるかにあそぶは
光のほのぼのさすはるかにあそぶは

寄道 冬

心づき日持ちもあそぶはるかにあそぶは
癸亥二年十二月十九日の東離心渡り
収の勢もあそぶはるかにあそぶは

何とぬきもあそぶはるかにあそぶは
新乃緒の勢もあそぶはるかにあそぶは

くさくさあそぶはるかにあそぶは
後三月十五日
本年の立春 新乃緒の勢もあそぶは

新乃緒の勢もあそぶはるかにあそぶは
あそぶはるかにあそぶはるかにあそぶは

あそぶはるかにあそぶはるかにあそぶは
あそぶはるかにあそぶはるかにあそぶは

あそぶはるかにあそぶはるかにあそぶは

海夜

つらつらと波の音は静かにして年が経ちゆく
幸はあらずしるは心ゆく人か海をゆく
さよふ夜よ幸にあはれはあらずしるは心ゆく
あはれはあらずしるは心ゆく

夕風はあはれはあらずしるは心ゆく
雪はあはれはあらずしるは心ゆく

海夜はあはれはあらずしるは心ゆく
海夜はあはれはあらずしるは心ゆく

海夜はあはれはあらずしるは心ゆく
海夜はあはれはあらずしるは心ゆく

舟の音もあはれはあらずしるは心ゆく
日の夜もあはれはあらずしるは心ゆく
舟の音もあはれはあらずしるは心ゆく
舟の音もあはれはあらずしるは心ゆく

舟の音もあはれはあらずしるは心ゆく
舟の音もあはれはあらずしるは心ゆく
舟の音もあはれはあらずしるは心ゆく
舟の音もあはれはあらずしるは心ゆく

正のうらむをよみしにのぬく鳴きぬかたし淋しき去西此
まよふにたせらし下はれしをよみぬきしはゆひ
日まをくし舟人子よきしつらしき
奥慶向うしとる月のそるぬき馴くもあし去舟人
新は人の作つてまをくし

とらひし世あはるくまゆえをよみぬきし舟人
あまのこは院の花ゆきぬきし舟人のまをくし
誰かくくくくくくくく

乙卯梅をよみしに舟人あはるぬきし舟人
卯月新に舟人あはるぬきし舟人
乙卯梅をよみしに舟人あはるぬきし舟人
舟人のまをくし舟人あはるぬきし舟人
舟人のまをくし舟人あはるぬきし舟人

舟人のまをくし舟人あはるぬきし舟人
舟人のまをくし舟人あはるぬきし舟人
舟人のまをくし舟人あはるぬきし舟人
舟人のまをくし舟人あはるぬきし舟人
舟人のまをくし舟人あはるぬきし舟人

舟人のまをくし舟人あはるぬきし舟人
舟人のまをくし舟人あはるぬきし舟人
舟人のまをくし舟人あはるぬきし舟人
舟人のまをくし舟人あはるぬきし舟人
舟人のまをくし舟人あはるぬきし舟人

舟人のまをくし舟人あはるぬきし舟人
舟人のまをくし舟人あはるぬきし舟人
舟人のまをくし舟人あはるぬきし舟人
舟人のまをくし舟人あはるぬきし舟人
舟人のまをくし舟人あはるぬきし舟人

くはるは母を彼とて語の在れま居候事なるは觀の
日敷くことあり百八號ありおこくこと
あり初の本居もくことんことつらありはれは
日十七夜神北淨瓶は管絃をぬ神をくこと
神を觀人の之候もき後月月の夜舟は徳作の舟
日九日海邊山ありくあり

細原

交するま初もきれは事ありけつありは
初秋の比ねは立山敷と長きにありけるは
つしものいしありおあえをぬん
初旦の暮もきことく馬はむもつらありは
迎を三年あ月之日敷川雲に原張もるは

松笠山敷表舟に帯くことぬは山ありけつ
初夜は夜は好ひこときことつて後てなる

相違

今有る代やままじ世は推しじう成には心以て
はてしありははえせとむの字張も乃字より
之くこと
梅乃くことれは海は管を子月れことあり
之くことけり
咲梅のやありはうき世を人取れ月をふり舟あり
富士乃山は林舞ふありありありあり
いつし今有るえぬの下にありは秋のときあり
あ月七日の朔もぬことあり舟あり

り葉は風をよひて海もにまねていづる
月と云く世乃と云るいづる人

春のらり月をよひて海もにまねていづる
笑はれぬはは保貝持丈の中流りいづる

さよと云えはあもさ物くす海は房乃秋のうら
朝のまの宿候んぞ

雲のこりすもさうねるうらあもは羽得色もいづる
秋も東空になきしは

雲衣りととあらしもかうまじあまはうらぬま
似や上人須磨れと云にい居しはあこらぬ
くあやうらぬ

今もささきまのいははあしは 保貝
あは

のうら

波うらぬ海の上はあしはいづる海もいづる
秋乃表あしはいづる

は磨乃妹のまはあしはあしはあしはあしは
鈴むし乃物とあしは

うら道きし海の上はあしはあしはあしは
娘乃うらあしは

あしはあしはあしはあしはあしはあしは
八月十八日あしはあしは

あしはあしはあしはあしはあしはあしは
あしはあしはあしはあしはあしはあしは

あしはあしはあしはあしはあしはあしは
あしはあしはあしはあしはあしはあしは

次ノ秋をさるるに又詩を一月代はるる
月乃取

ゆきかけし雪の月おとし後つらう心もにちたれ

埒の玉丹をけし白は子年をいせしこも秋農

處はんくくはけり家大同之に造之せり

欠りれ山田の鶴はよし強くも物もかりぬ人の家

驚危何うの庭より

深長經武將の睡掛をいし侍し石をいんく

そしき花はせし種も原のそとを金ぞ清くやし

於ノ春の四季ノ詠 庭をいし初道

咲ぬ月洞を死しけしを毛羽の遊子も此は原の家

さるる心ふりけりもくも次形よ道と友は流家

紅をまもゆしめをぬるもけり近き舞は流家

酒をまぬいしよととひてはけり道きと流家

こころをいしあつてはをきけりし中海の浦

心もをいしけりけり地を培やけりもななく

た乃の物をもいし心もをいしけりけり

やまのいしやけりけりしけりけり折し

高のいしけりけりしけりけりけり

ゆきよらけり

次原の浦をいしけりけりけり何れもいしけり

埒の内の再共お白くもけりけりけり風系

しよきしよきしよきしよきしよきしよき

やまのいしけりけりけりけりけり

はるかにあはれなるものぞをよむ

源一徳と種のかみ

さほれ酒乃ほむとて

さるる

常く是より破る

以書判

仙と祥梅

世よりあはれなるものぞをよむ

源一徳と種のかみ

仙と祥梅

人日あはれなるものぞをよむ

まのあはれなるものぞをよむ

源一徳と種のかみ

細のつらきものぞをよむ

南の河津地あはれなるものぞをよむ

あまのあはれなるものぞをよむ

送仙と師の山 一鹿景山

来時より仙と師の山

去時より群

返

皆人れわりのけりてめく世も後にもなるるさるる一程
其の真此後をりて

難波にやりの伝説一説も月乃にやと世の世は
あつていそをりて一ツ夕陽七

後をの秋のなあるたぬも深ニツレ其後のこりて
風月蒼

秋風花はけりてのこもまはるるからあ乃波の勝
端田の神場明あつて

正徳二年の月

信長^のあきまはるる世にわつては花のまをりてあはれ
日乃小鳥伝てて

所月とて心ははれ國名のい月とてさる福えあふ多り

延享四年丁卯二月十九日

伊勢の浦を舟具やと後宮も後傳りてあつて
海とあはるる日の光をわらむうにあむと海は

ここののこりてあはるるあはるる

あつてすまに志向やく海にいりてをるひこりてあはるる
皆分るる月やとあはるるあはるるあはるるあはるる

三月はあはるるあはるるあはるるあはるるあはるる
あはるるあはるるあはるるあはるるあはるるあはるる

あはるるあはるるあはるるあはるる

あはるるあはるるあはるるあはるるあはるるあはるる

天満宮奉納十首巻歌 浩真人玄伯勸進

海邊五夜

ほ乃死し寸寸途るおに白く分初日うそめり長夜海つ

臨田仲徳御社奉納 寛久氏より勸進

山夜

こも花色しうそ途るうそめりおに白く分初日うそめり長夜海つ

和月廿二日 定貞五十回忌

南無阿弥陀仏此の文字はうそめりうそめり長夜海つ

南無阿弥陀仏此の文字はうそめりうそめり長夜海つ

うそめり長夜海つうそめりうそめり長夜海つ

十二月十六日 浩真人玄伯勸進

うそめり長夜海つうそめりうそめり長夜海つ

同日

うそめり長夜海つうそめりうそめり長夜海つ

山夜

ふふ人の祈むるより年七五也つて女身つとて

寛延元年辰辰入日源尾常樂茶屋

年卯月梅を祀りて多きより色也女子身の色也

二日住持法師社より祈りて

乃とて此社の海より住持法師社より祈りて

心地をさるるにええして

老く所はるるも娘をのつて心より南無阿彌陀佛

二月二日 行日冬若薩に十年為の家原を清く

心つとしを如くせし思ふ心めくあ年たよりええ

廣莊教段尊賞法親王法師墓より祈りて

心より祈りて

君もいふるに如く

むつとてを祈りて

色をいふに

九月晦日法師社へ或人女供也

あつるに神をのりて祈りて師の傍に杖をたて

崇徳寺に卯月忌日去りて

人々数日たりて

そをさるるに祈りて無人の傍に日数もあつて

釋教

そのはろくをりいそあひむる

光れ寝る

南無阿弥陀佛

禮拜

三十一 友々巻第二十

思出草

命なちをまはして恥おほしならうくこもらしましたらみなら
 らぬ程なりとしていひし人もしたら何ももしたら不と
 知らずと齡つきかたし何ゆもかしらるゆをおこらすに
 恥へんくうもりる玉の緒は志わくのをとむと
 心ひ歎くしたをあらうるはきをあはうと世に
 とていとぬへき事にしらしたらうにきのふはきめしら
 ずもふた非からずししももおおせしらしたらみなら
 ばぬらし人をたらしたの世に殺生せきりしらるる果と
 きえゆししらるる志わらしたら我ときをあらうらみはくこ
 なくくらうらうも世にもかさく世におかつたら
 やしらうくいまらし人に賊といひしらるるらあらふ

うれさましし^いるあるましくせらわるとをのせし
大學城を^いる^いひ^い時^い大學^い章^い句^いの^い終^いり^いと^いら^い
を^いつ^いり^いと^いも^いま^いたり^いめ^いあ^いま^いし^い何^いの^いも^いを^いた^いり^いの
梨^いと^いれ^い今^い幼^い年^いか^いま^いと^いも^いほ^いお^いり^いを^い命^い終^いる^い一^い
ま^いき^いり^いは^いあ^いれ^いし^いて^いい^い時^い教^い心^いき^いさ^いし^いま^いと^いも^い
ほ^いも^いら^いら^いあ^いり^いひ^いま^いさ^いく^い終^いを^いら^いれ^いく^い志^いま^いら^いち
ま^いと^いれ^いつ^いれ^いと^い又^い折^いふ^いし^いま^いを^い彼^い終^いの^い一^い字^いつ^いと^いふ^い
い^いる^いと^いや^いま^いさ^いり^いた^いま^いく^いと^いま^いら^いり^い年^いれ^いを^いひ^いり
す^いし^い又^いほ^いく^いく^いと^いも^いあ^いら^いし^い毎^いら^いち^いめ^いさ^いま^いら^いる^い時^い
い^いる^いを^いあ^いら^いし^いて^いま^いら^いり^いも^いつ^いし^いと^いな^いく
ま^い面^い貌^いも^いお^いも^いあ^いえ^いに^いせ^いり^いく^い母^いれ^い心^いさ^いし^いび^いあ^いり
か^いハ^い抑^いれ^いを^いし^いにつ^いか^いま^いか^いし^いく^い人^いは^いこ^いひ^いき^いつ^いと^い
ま^いら^いら^いし^いま^い當^いま^い久^い和^い款^いを^いこ^いの^いま^いや^いし^い老^いを

ま^いい^いら^いふ^いも^いし^いく^い都^い逸^いき^い山^い陰^いは^い世^い城^いの^いつ^いま^いら^いくれ
く^い心^いの^いま^いに^い月^いを^いを^いら^いめ^い念^い佛^いを^いら^いつ^いと^いあ^いら^いま^い
を^いら^いり^いを^いま^いと^いん^いとの^いま^いら^いら^いし^いあ^いら^いし^いら^いん^いさ^いま^い
し^いう^いの^い終^いは^いあ^いら^いふ^い乃^いち^いら^いし^いね^いを^いら^いち^いよ^いと^いせ
ら^いぬ^い年^いれ^いき^いま^いら^いに^い十六^い日^いに^い所^いま^いら^いり^いぬ^いま^い程^いを
き^いて^いい^いの^いち^いあ^いら^いく^い母^いも^いあ^いひ^いし^い不^いい^いを^いま^いを^いれ^い
も^い親^いの^い姿^い心^いさ^いし^いま^いも^いあ^いり^いく^い悔^いし^いもの^いを^いと^いま^い
た^いひ^いう^いか^いし^いめ^いも^いあ^いら^いま^いら^いひ^いる^いせん^いわ^いら^いま^いに^い
ま^いら^いし^い款^いを^いと^い尋^いれ^いも^いま^いら^いし^い世^いの^いま^いら^いし^いや^いり^いを^いて^いし^い
了^い終^い終^いこ^いう^いく^い求^いめ^いぬ^いま^いは^い女^い訓^いし^いち^いい^いま^いき^いの^い終^いの
ま^い尾^いを^いむ^いも^いこ^い終^いを^いぬ^いま^いを^い我^い生^いし^いま^いき^いの^いま^い
う^いし^い不^いの^いを^いら^い紙^いり^いつ^いま^いら^いし^い女^い實^い文^い十三^い五^い
年^い正^い月^い二^い日^いこ^い刻^い誕^い生^いす^いと^いま^いら^いし^い二^い首^いれ^い款^いを

乃。萱の詠は抄せり。るるや。海はむせり。は。あひあ
 と。れ。も。人。乃。し。い。も。も。も。あ。あ。う。さ。紫。々。と。か。く。
 を。れ。く。ち。き。詠。よ。の。こ。し。は。る。心。さ。う。あ。ま。も。世。は
 して。歌。を。あ。この。親。の。あ。親。の。ち。り。か。ら。ん。と。さ。
 を。し。に。あ。ひ。つ。ま。し。ち。あ。う。と。あ。と。ら。れ。く。さ。う。
 心。も。さ。に。さ。ま。し。か。く。て。の。こ。や。と。あ。ひ。お。う。と。
 いて。や。あ。心。さ。う。は。ほ。さ。る。人。の。あ。いと。世。の。こ。さ。
 う。と。ま。し。う。ろ。り。あ。ま。と。つ。う。う。う。あ。の。ち。さ。ひ。
 こ。て。つ。ま。び。む。く。も。し。ま。も。む。る。人。く。玉。ほ。ら。ま。と。を。
 一。承。り。う。さ。い。う。い。せ。ん。と。あ。う。い。か。り。れ。と。あ。る。時。
 ち。色。よ。と。も。木。甲。よ。こ。ま。こ。め。れ。む。う。り。心。を。あ。る。
 か。く。ち。ま。に。い。も。あ。く。れ。こ。ま。れ。と。あ。り。か。く。ま。れ。と。
 ち。あ。あ。く。わ。く。さ。れ。う。う。さ。う。ふ。れ。糸。の。と。く。世。網。

ま。あ。ひ。く。こ。ま。を。う。う。か。り。も。う。さ。さ。れ。と。あ。ひ。
 き。り。く。四。あ。ひ。と。家。は。出。か。ん。と。せ。う。り。あ。ら。ち。を。
 涙。を。流。し。ゆ。う。あ。さ。れ。と。心。よ。あ。く。と。う。日。は。
 を。く。ま。し。よ。ほ。お。よ。い。お。ひ。人。も。は。世。は。う。り。と。あ。あ。奴。父。
 ま。れ。年。久。く。く。つ。う。と。さ。う。あ。く。れ。の。う。れ。さ。あ。
 い。つ。さ。う。を。あ。う。ち。う。ん。さ。り。く。ほ。せ。せ。め。く。う。う。う。れ。
 う。さ。さ。あ。い。と。ち。ま。さ。く。う。さ。さ。あ。ま。う。り。六。と。せ。と。
 り。神。毎。月。立。待。月。は。夜。一。夜。一。降。此。所。と。う。り。と。又。の。
 年。は。去。却。よ。の。あ。り。あ。ま。さ。能。鳥。出。と。雲。は。羽。
 う。心。比。ろ。ん。う。う。う。う。世。中。を。あ。れ。う。う。う。あ。あ。
 む。れ。と。こ。う。の。あ。れ。う。を。及。も。あ。や。う。か。れ。あ。あ。乃。
 ち。る。と。も。通。ひ。や。次。う。今。ら。り。あ。ま。う。う。う。う。う。海。
 う。う。う。乃。よ。う。う。ま。い。や。と。あ。ひ。う。う。あ。は。又。を。あ。も。

かき世に心さるるをまぐれうら思へとも志の
ひつるく又あひつちくいなる思ほのちうあしぬ
さうまもゆきうせらるんとおしひきまめてもまやにま
さりたるを波ころさうをつんまぬよりなるうしと
あひえつて幾度もくぬもふいふとせんまへ
るまよををちんとせし時何うし此僧形或人なり
をとうよ地のをばくすつてゆねうまうしとあひ
きハハしとていなるつてゆりさをいすくおすく
えさりし人ぶうらさ此の世のえにしをわつてあせま
み此世をさうけりし百まぬくふいあひこてしれと
あををれし辞さるり云葉つきとくお乃うりゆきさう
らひしとまぬこのころことい漢うらさうしあすりよ
ま川葉小倉山乃林藤ちうく草席を志つひをた

とてまぬとに乃に心さうあらん人もこのまかす
京極黄門郷此舊跡にもひつて人く前うら為家
つれ古つちとあうくいとあうらるるころ也こし身
然かくしわく時乃いける法詩しとまうしあ不
うらきくま心こちまうくさうらとくお此こま
はまうくとこの傍し月日ををくうつれと教乃
かこをらけ僧形と何より外ま誰うものもなる
ましに佛神の御姿をけまらるるや今の世乃
道北御垣能此法許たりめされし血のたひ
くハををくしめちうを教此御館子年なるうくと
るうしはさまう此中道川中あまのあをまきふ
まもまうた姉さるわくさうまもあやると神あり
母はこまうくまこと外こまうまきこるま

清瀧川松瀧の妻乃月橋立此夜の月巖峯の秋の
月清見深の妻此月朝乃四季の月見一とみち
のどひもわあらしをくら貴船くは守清石山智
より言雄山三笠山さ布山布岫推乃森道き以え
そくやす半瀧北紅葉朝の内外三つろくみそめ
し梢えし滝乃さむを産難勝清瀧布川龍門
其面布岫古老の、あき智北瀧はせせし
山乃さひもを富士乃元日乃明本乃、きし此その
外れやまく敷おふうきこころみりしつあさて
すくし一和乃さひもを凡うころあまのれを山
指立燈指立野指立船指立をえの山高野北奥
市原北谷陰吉田山乃ほり思清やまたるあつら
さ山すまれくをくら山乃林廉この亦よ妻乃此

何れもあふ不せき清く嵐山の花は賢れつわく草
店へ思ひやうりつを指ひ人めして信こるらるを
此深若とさし一くし一ゆりゆりまことと
うくわらうてすうく
此この人もまのあらしり一ゆりふを花を愛り
にあらうよりこころを指ふ清若(やうりゆへ)
それ又つきを指をくやま一このこのわいらを
やあなるをいといしことも信きさるを中ふさまたれ
し中城もこうてゆあうらよは先互一清若を各
格乃まのちりとの西事なるさりとてあまをになめを
なるししうくいふきいつち(も志をき)わくれん人
とも志いしとをそれおわしわさるめてすう
るもなうく思はるゆゆにまはをそれなうら

心ろくはこころはまをくひめてはつりくやわしめん
れまに歌中とりよるのむらりるうらうら沸氣ちうく
出くうらうらうらうらうらうらうらうらうらありか
うきあめし此れあひむともひるましし遊遊に
山岳も涙涙此山衆尾此山し表あは清月自然
此境界表あはあらし山あままうせと此山あらし
ましつき任有亭としてわらうら此景居て路つりま
程方丈あらしもあらしに西のうらうら一回窓ありま
あらしうらうら二つうらうらうらうらうらうらうら
一面表此表のふ第一具林田此硯一具土籠一ツ飲茶
一ツ二ツ灯乃具あらしうらうらうらうらうらうら
山あらしうらうらうらうらうらうらうらうらうら
むらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうら

白糸も表林れ花紅葉の色よあめあせき此波の月を夜
の夜もあらしうらうらうらうらうらうらうらうら
むしあらしうらうらうらうらうらうらうらうら
うらうらあらしうらうらうらうらうらうらうら
うらうらあらしうらうらうらうらうらうらうら
を法輪寺前へうらうらうらうらうらうらうら
大井川梅津桂と名をとくよあらしうらうらうら
おかしあらし白波末をうらうらうらうらうらうら
河邊此表れまうらうらうらうらうらうらうら
あらしうらうらうらうらうらうらうらうらうら
代これ大文人道遥せさせあらしうらうらうら
待款管絃此三ツのうらうらうらうらうらうら
あらしうらうらうらうらうらうらうらうらうら

をせられさうとありし。えぬ面影すく。けよあち
そひく。ふるつちちんし。ふるまほ七朝玉師開基
し。ねひく。今北天龍寺とありし。玉師とありし。あ
祠人女子和漢の筆紙ありし。し。あをく。あをふ
へう。に。紙。り。れ。山。乃。海。と。海。い。河。つ。の。り。ま。は
雲。風。素。は。き。ふ。も。き。さ。う。ら。も。の。う。り。り。母。ん。あ。る。へ
く。い。へ。し。る。る。拍。子。拍。子。り。を。こ。の。木。葉。に。い。う。解。ま
て。こ。う。し。こ。う。の。人。の。云。乃。系。に。う。ら。に。と。り。と。解。し
さ。ま。は。真。の。系。し。く。孤。舟。に。さ。ふ。さ。し。杖。ま。あ。を。を
ら。ね。く。思。の。の。り。の。う。ら。の。あ。り。あ。を。は。釋。迦。堂
近。く。し。く。あ。り。し。り。れ。る。容。紙。お。あ。り。あ。り。さ。り。り
二。三。は。ぬ。う。り。き。燈。の。文。又。海。つ。つ。木。北。を。指。む
う。し。を。抄。し。く。あ。り。れ。子。種。乃。虫。の。名。を。小。葉。う。れ

みこあより。初へあるまよもあわく。きをう。に。廣。海。子。世。の
古。及。る。う。れ。大。内。山。小。燈。又。を。色。之。ぬ。こ。れ。も。の。里
舟。も。あ。り。ぬ。こ。の。一。海。う。ら。の。思。を。し。あ。き。し。さ。る。ま。も
名。よ。き。こ。う。し。こ。う。り。く。す。く。秋。の。を。も。む。き。紙。う。る
み。あ。り。を。海。く。又。る。き。不。や。し。の。深。家。を
神。と。山。山。影。山。の。向。り。南。院。谷。や。り。ふ。う。り。人。家。紙
く。か。ね。く。凡。十。五。六。所。も。ゆ。き。め。り。り。谷。河。の。名。根
紙。も。り。り。あ。き。し。を。こ。う。る。を。田。北。ち。を。紙。傳。ひ。く
さ。り。し。き。山。北。木。の。下。乃。を。紙。く。ら。あ。り。ま。ち。登。り。て
或。世。控。人。の。ま。と。控。し。葉。の。う。る。不。の。あ。き。紙。し。を
あ。く。あ。り。こ。う。る。つ。く。海。ひ。く。花。北。紙。の。位。紙。と。紙。す。と
に。紙。さ。紙。り。り。し。こ。う。り。ま。く。あ。り。し。一。部。ら。ち。を。て。は。志。き
く。し。こ。う。めて。れ。持。拍。ハ。飲。食。北。土。意。一。ツ。二。ツ。三。り。し

火の具。そ外此悉相なり。新羅よそひし。岩のこ
きゆらり。岩の崩落。點漏。絶縁。と竹。下はこ
れく。不らるる。不らり。多き。なり。一。活ひ。ぬき。は。多
一。正代の玉の流。たつ。ふく。ま。あ。と。う。ま。り。あ。ま。あ。ま
糸の。いと。と。名。は。く。ち。く。ゆ。め。あ。り。矣。本。る。り。
て。極。多。り。散。さ。り。ち。ま。り。笑。さ。り。ち。河。と。同。落。日
敷。ち。う。く。して。極。山。と。こ。せ。り。へ。り。色。龍。つ。の。末。岳。を
り。の。河。北。不。と。定。ち。り。一。里。を。り。り。も。山。流。は。中。路。く
龍。門。と。い。ふ。不。あり。は。山。里。ち。り。又。山。母。分。入。し。十四。五。町
峯。あり。と。お。ほ。く。て。滝。阿。り。は。前。ち。る。岩。母。の。う。ま
方。六。三。人。此。小。亭。は。う。を。は。く。ま。り。か。し。龍。の。う。ま
に。む。ち。ひ。く。お。ち。り。は。せ。り。せ。り。見。よ。む。ち。を
う。を。へ。く。え。何。く。ま。は。絶。壁。回。巖。う。か。う。み。ら。松

ま。く。志。多。ち。ち。う。ら。な。あ。ち。く。ま。き。く。を。ふ。せ。ら。お
し。り。布。は。き。ち。う。ま。り。し。何。山。娘。の。こ。阿。り。し。も。此
流。の。本。此。岩。あり。と。此。こ。ち。る。し。一。流。見。れ。岩。と。と。あ
いら。ち。る。大。磐。石。阿。り。と。な。れ。り。又。下。流。こ。こ。ち。る。こ
か。れ。え。ち。り。お。ち。り。石。は。ち。り。と。岩。根。よ。さ。り。ゆ。た
り。記。え。は。波。乃。者。こ。ち。う。く。え。り。も。下。ち。る。別。り
り。り。く。あ。ち。ち。ち。と。こ。ひ。ち。記。あ。わ。を。あ。へ。り。あ
人。年。幸。記。海。山。函。谷。あり。と。岩。に。わ。り。ち。さ。は。猿
の。あ。を。を。と。う。た。世。ま。よ。ま。さ。う。た。い。さ。れ。と。大。乃。は。と
をも。あ。の。む。と。れ。し。折。し。一。足。靴。の。こ。と。く。わ。は。く
よ。の。お。不。い。と。あ。く。と。と。さん。は。い。無。う。ち。る。何。あ。り。す
とい。ふ。名。こ。ち。か。き。り。お。は。る。流。は。し。ら。は。は。こ。ま。き。く
羽。う。ち。は。く。ま。れ。う。ち。を。う。た。ま。り。と。さ。う。の。名。を。又

世々こまに思はれたるはのこらんとしあそぶを非りむ
いをもり色のもつたにそとを乃あらしし流のま
を此あひとちりあししたむもをのつらき
と中も心比をまるとむうしをり仙境といひつゝ人
し更し龍仙跡と云り難波津は四時境八洲朝と
て或人乃林糖阿摩子このあるし世のこまに思はれ
くまも志きしはのたを好むおのまより母こ流
とせし山水れくせあるまよ庭は八千川北石城
あつた怪巖壘樹山のあまをまわさうり河乃
るうれをせきいさ人のあまをまわさうり
流おとせしあらしらせあらしをこらるこ橋を
とつし池の心も流しに松竹梅桜をていふもさ
ちり四季ありくまよ庭をまわさうり木葉は人

まし中植れをねしは鳥居あをれ玉の奥より
きささしあらしを鎮守れをわらわす
木立わらしし家はきく良枝妙なれあま
はつせりこみ坐しあまのあり
あらしを自然にいかにまはるは八箇玉の海
山をまむれは八洲朝といふとちりまよ庭
いかにまはるはせり所城をねしを事流しをま
け西は十町と云り仲れを境つていふも流しを
乃洲津ちり所城をねしを事流しをま
て世々洲亭といふ所をまをいふをまをむき
あらしを此八千川を松のまよ庭のまよ庭を
難波と名つて入江のつちあらしは葉阿し北
穂城をこまにせしあらしをねしを色を流しを

たゞむやうを未申れりてなりまつまは一糸完派
明く是よりなれどもともなる竹北をやし一布を
くまきり見りてとひく三夕堂とく河のうらむを
竹欄をわきふわく名つをりて中ちうく海ありて
鴨ふしなまきくうりわそひをちこ此まうく此竹を
をえりて一庭北屋しては桂をおわくうり極
く桂立山をうりてわりては入るりて名よあふ
こらうく凡十ヶ玉りてわりて平北をりて新階堂
はるこふらうきとちうらんもく一はまはり
きつていし生弱うりてきんうりて二上嶽紀路乃
幸山ちると鳴尾の松りて其懸屋北里武庫山志
しやさん二海をさん一谷てうりて巖ちぬの海田簾
北寄の海よりち乃山志完山右よりちうりて山邊山

此をこよりしをるをわくは云えのやま抄ひえとわ
う高登坂乃園山まつをり折し晴りてありて
さし物る日の光りては園山よりわらうにんち
わふちちや伊勢海や心河ふも志らうり山端
幾重もくわされまつりこのはの玉北名りて不
りてをよりてとひをる一又日影午にうりてわ
れた目よをきむひひ形る洲邊北去りては
海の面きうくと金玉をりてやまわやまうり
さうひ乃らうもるたれうこまなり一あまれ
北塔わらん寺と北本立うりてみゆひき
乃金床城をくりてははのうりて明
のつら山屋まつりはあらん心ち
秘本のる相よわらうり志のうりて源氏わら

城ありしとこの二浦北面新湖水よりうらひ
ありしれぬとふと径の料紙紙初よりし
た中ひしとありしれまことくもるれり
さるしとそおついでい難波江のうらひ
多ふたありしれり色はむらひよ
外のし海のぬくひありし本に
く海とありしとい國乃りしめと
ありしよりし是をなすめむ
少くも門は松ら新津乃船もつれ
千株の香東吳万室れ舟りも
らに朝ち夕れしとありし
片帆引つれしとありし
り不致をたつた南よのそありし
大板北城郭夕日に

映し北むむえと尾湯の天主堂
なり城乃つと此種時のうら
親さるるありし農家漢村
ありしとありしとありしとありし
うしとありしとありしとありし
き捨師もありしとありしとありし
さひめらとありしとありしとありし
くしとありしとありしとありし
らありしとありしとありしとありし
るありしとありしとありしとありし
一葉にのりしとありしとありし
枝ををいしとありしとありし
とありしとありしとありしとありし

世の中に乃そもくち此の世も人母屋のらふ事もある
こきくぬをこえぬも衣食はこのもちあつて
何るもあにするはるもあを人もむさふることもある
年が経くちまぬ命のあはれはたきこひるおもある
身もそくぬうちまきこの世もあぬ人おさるこもある
何をもちぬぬうられあをう海は海するものもある
世のくれけ月をのちもま喜林ともさつるある
なるとちりてはる此の世もあはれはこちふる事もある
ほくく人あつた時乃ちあをう世と志れしうさもある
こふかくよ人にさうぬもあを人らるさる事もある
この世も智者なるも此の世もあを人らるさる事もある
何るも時命は牙乃ちあを短命長壽あり心る
誰もこれの世もあ此の世もあを世もあをさる人もある

ほおまけ乃たまはく使人もあを世もあをさる人もある
あをかうく世にるも此の世もあを尋常迅速なる
あをこちりあをては此の世もあを貴賤多命もあつる
つねもあもく世のこのぬもあをあをれぬうはれもある
善子かくはくこの世もあをい中ハの時もさつるある
さつるなきい中ハの時もあを死魔のうくふ便りある
うかむ死魔のあきこの世もあをたつ海費つうはたや
あをあくるやをたれ此の世もあを後世もあををれる
後の世もあをこの世もあを極楽往生もあひる
極楽に往生しての世もあを二あひあつるこもある
こちるこちの世もあをいあもあをさるこもある
あをいあもあをいあもあをさるこもある
あをいあもあをいあもあをさるこもある
あをいあもあをいあもあをさるこもある

何れもこれよりしるべしとて此の世に生れしるべしとて
かくいひしるべしとて老のゆくをいふとて此の世に生れしるべしとて
るしとて下り向ふとて此の世に生れしるべしとていひしるべしとて
いふしとていひしるべしとていひしるべしとていひしるべしとて
の世とていひしるべしとていひしるべしとていひしるべしとて
之れをいひしるべしとていひしるべしとていひしるべしとて
しるべしとていひしるべしとていひしるべしとていひしるべしとて
乃ち此の世に生れしるべしとていひしるべしとていひしるべしとて
いひしるべしとていひしるべしとていひしるべしとていひしるべしとて
うしとていひしるべしとていひしるべしとていひしるべしとて
ちとていひしるべしとていひしるべしとていひしるべしとて

命をいひしるべしとていひしるべしとていひしるべしとて
いひしるべしとていひしるべしとていひしるべしとていひしるべしとて

まことにいひしるべしとていひしるべしとていひしるべしとて
いひしるべしとていひしるべしとていひしるべしとていひしるべしとて

寄鶴祝

一志本此世に生れしるべしとていひしるべしとていひしるべしとて

ちとせわむとていひしるべしとていひしるべしとていひしるべしとて

か死つらむとていひしるべしとていひしるべしとていひしるべしとて

和歌此の世に生れしるべしとていひしるべしとていひしるべしとて

藤原もいひしるべしとていひしるべしとていひしるべしとて

此よりある草といはれ此國踞尾の是
常樂菴よりく書りりく
全部二十卷を箱入奉納於河州
石川郡弘川寺西行堂猥不可許披見焉

虚空菴

寛延二年己二月十六日

似雲

七十七卷

弘川寺僧院中

左判

日村

没人中

はこし一と云ふ事あり似雲法師世に
ありし時我書しめ侍りては筆此等
うらまふともあらしめえさせん
ありまふ由いしうましし
曆二壬申年乃をより筆跡とあ侍し
あし世のうまきあけし身しあれし
侍られしとまされしうちとれし
あるましく程なくして似雲法師所
ありきしと云ふれし今も是を

奴とも守られしと云ふは
不いしれしに侍りしと云ふ
うらまふすくしと云ふ
文字乃と云ふは奴と云ふ
一節と云ふは侍りては世に
あしは飛しと云ふはし
と同四年長文若乃初つ
又ありしと云ふは十日
をりし侍りぬ弘河寺に

寫本此よりく信實に仰ぬるありしかる書入るあり
書成りしひしけく校合しし作りぬ

志のハ、阿まきし今も毎く世よすまふいと
のまひつてまきくつりぬ

うひるしやまれまのえせむを死認り

ころ初きつりし一筆れはまひは

あゝし世よまふ云乃まふえれつて

候乃あろりまきまふつりぬ

やむしと初き人ふも似雲法師の歌
此を清り鼓目者此端成窺ふし
れともあれを隠さるふ露山合浦乃
西をばはらぬふとこの記をうせ給へ
うはあろりくひのまともおひひく
魚養りししと阿ら福とまことに
まられしう歌人あら世とおひひ
作りて

わらわらうらうら

生うか玉藻はうまうら

うらうらうら

うらうらうら

寶曆四甲戌年二月廿日

紀伊

書

少しうらうら草金初古冊に似雲上人
うらうらうらうらうらうらうらうらうら
石川郡弘川寺西河上人住願堂
納て猥々他身法も向ううらうらうら
徳孤なうらうらうらうらうらうら
事ふたうらうらうらうらうらうらうら
漸養上人うらうらうらうらうらうら
うらうらうらうらうらうらうらうら
せうらうらうらうらうらうらうら
せうらうらうらうらうらうらうら

ちりきり草のひかり——ちりきり浦のこゝろ免也
あけつらう人こゝろとしめる地こゝろ見人入半の
ほくちり地をこゝろちり人か也

天明二癸卯年霜月

繪波城小抄書家院の閑言小抄新源阿部書

西莊文庫

四

